

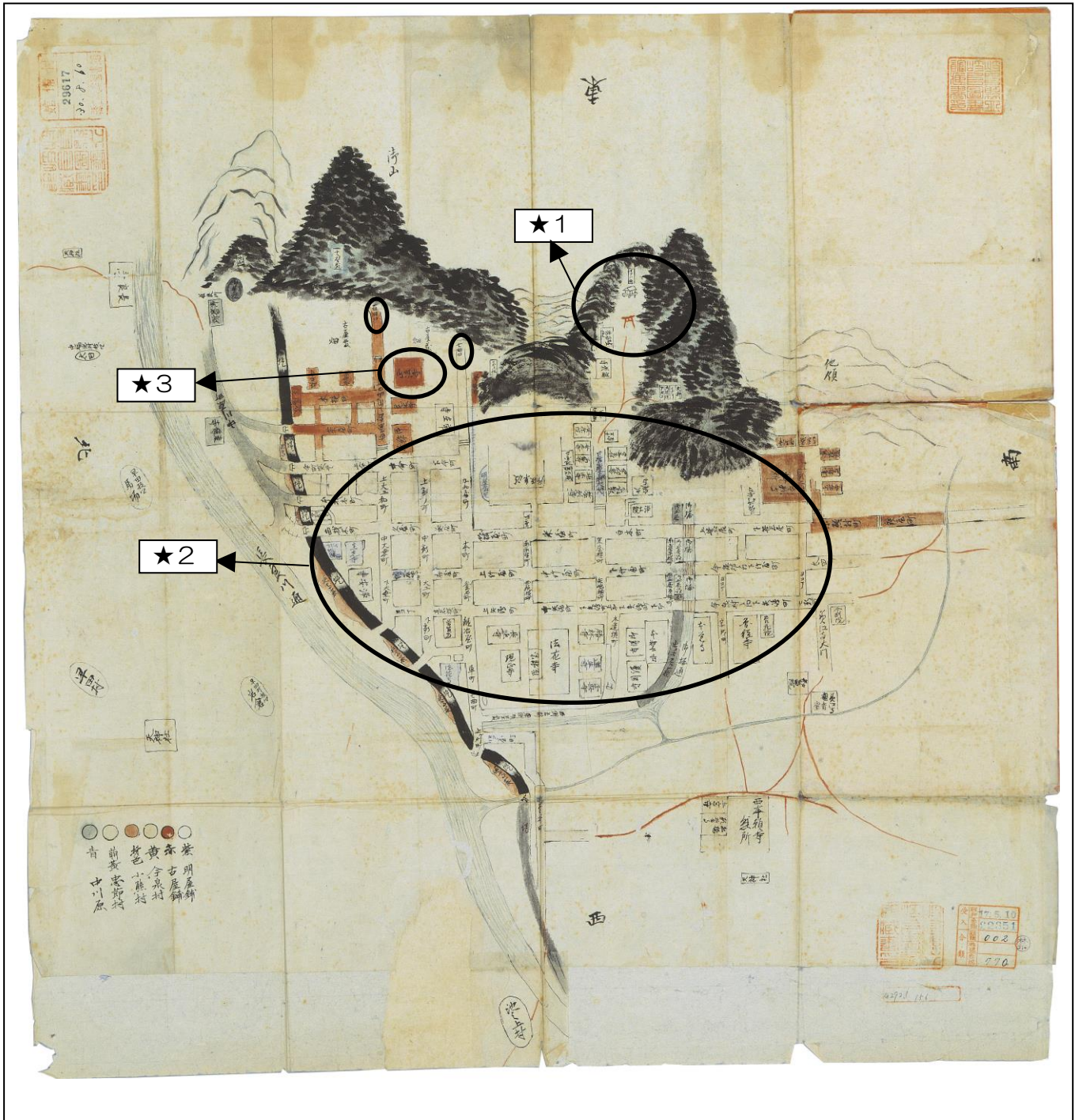
授業で使える当館所蔵地図

No. 48 『(外) 岐阜町絵図』

作成年：江戸後期

サイズ：61×60cm

作者：不明



【解説】

金華山の西麓に広がる岐阜町を描いた絵図である。戦国城下町・岐阜町は、斎藤道三時代に誕生し、信長時代に大きく発展した。金華山の頂上に築かれた山城である岐阜城は関ヶ原の合戦で落城し、西麓の町並みは炎上したものの、その後は当時の隆盛をうかがうことができるほど復興していった。重臣たちが屋敷を構えた古屋敷、東西南北に整然と築かれた町並み、各種職業に関わりをもつ町名、町を取り囲む濠、南側からの敵の侵入を防ぐために建立されたり移転させられたりした寺社群など、この絵図には戦国城下町・岐阜町の当時の姿を探る手がかりが数多く残されている。



★1 伊奈波神社

1539(天文8)年、斎藤道三が稲葉山に稲葉山城を築城するにあたり、現在地に遷座した。この際、その地にあった物部十千根命を祀る物部神社を合祀し、稲葉山城の鎮主とした。以降も信仰の総本山として崇敬を受けた。1900年以上の歴史がある神社であり、今もなお、各地から参拝に訪れる人が数多くいる。現在でも岐阜祭り初詣等で賑わっている。

★2 岐阜町(旧城下町)

武家時代、領主の居城を中心として展開した都市。「城下」という表現が広く用いられるようになったのは江戸時代のことである。領主は、直属家臣団、商工業者を強制的に城下に集住させ、楽市楽座などの政策を通じて農民を土地に緊縛したので、都市と農村が分離し、いわゆる城下町が次々と成立していった。城下町では城郭を中心に武家居住地、町屋(商人町、職人町)、寺院などが整然と区分され、武家地が全市街の50%以上を占める場合が多かった。関ヶ原の戦いの後岐阜城はこわされ、城下町ではなくなったが、残された岐阜町は道三・信長時代の城下町の面影を残している。

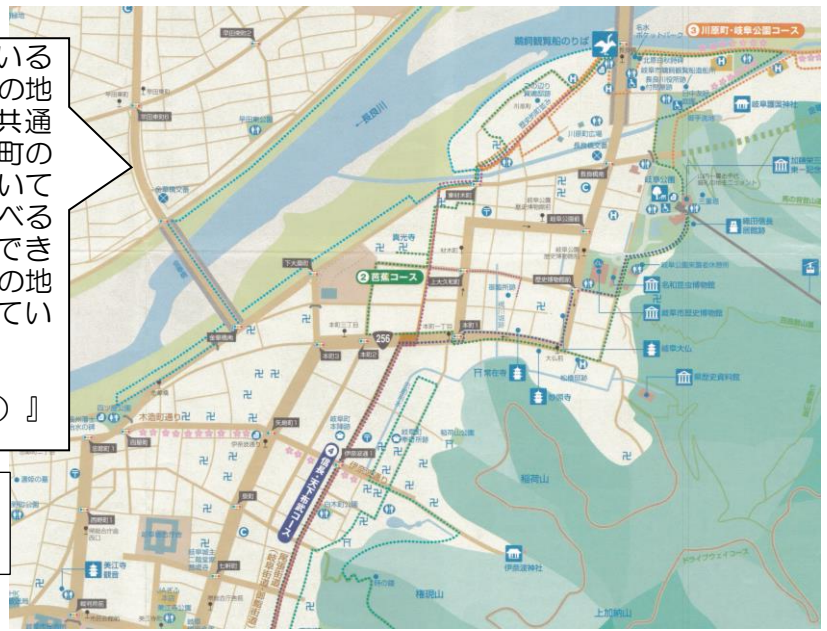
★3 岐阜大仏(正法寺)

日本三大仏の一つに数えられるこの大仏は、乾漆仏としては日本一の大きさを誇る。天保3(1832)年4月に、実に38年の歳月を費やして完成した。堂の高さ25.15m、廻り19.39m、仏像は坐仏で、高さ13.7m、耳の長さ2.1m、鼻の高さ0.4m。絵図には正法寺前には畑が広がっており現在のような長良橋からつながる道路は通っていないことが分かる。逆に当時は正法寺の西側に道路が広がっており、西側を主要な道路として使っていたと考えられる。



上記の絵図と現在観光用に出されているまちあるきマップとを比べてみる。過去の地図と現在の地図とを比べてその変遷や共通点を見つけていくことで、今も残る城下町の町並みや、神社、登山道、街道などについての理解が深まる。また、現在の様子と比べる中でその変化や歴史を実感することができる。学習する際には、時代の異なる2つの地図を比べながら変遷や特徴を捉えさせていきたい。

参考『ぎふまちあるきマップ
(岐阜市にぎわいまち公社作成)』



この地図は、岐阜市にぎわいまち公社から許可を得て使用しています。

【利用の例】

○岐阜町の変遷を捉えることができる

→当時の城下町の面影が残る岐阜町と現在の岐阜町の様子を比べることで移り変わってきたもの、今も残されているものを知ることができる。

- 「正法寺」や「浄土寺」、「伊奈波神社」をはじめとする寺院。
- 「七曲」や「百曲」などの登山道。
- 城下町の町並みや道路。

○身近な地域の歴史に興味関心をもつことができる

→社会科における「岐阜市の学習」「歴史学習」、総合的な学習における郷土学習において、地図で調べたことをきっかけにして、「実際に見てみよう」という意欲を喚起できる。

- 「正法寺」の「岐阜大仏」は今、どんな様子で残っているのかを実際に調べに行く。
- 町並みを歩き、実際に残るお店や住宅、現代になって姿を変えた建物を自分の目で確かめる。
- 「材木町」などの町名の由来を調べる。